

# 住民参加による問題解決型学習の実践 —ほくえい未来ラボを事例として—

長曾我部 まどか<sup>1</sup>・谷本 圭志<sup>2</sup>

<sup>1</sup>正会員 鳥取大学准教授 工学部社会システム土木系学科 (〒680-8552 鳥取市湖山町南 4-101)  
E-mail: mchoso@tottori-u.ac.jp (Corresponding Author)

<sup>2</sup>正会員 鳥取大学教授 工学部社会システム土木系学科 (〒680-8552 鳥取市湖山町南 4-101)  
E-mail: tanimoto@tottori-u.ac.jp

地域運営組織には、地域の生活サービスを維持することやコミュニティビジネスの事業主体となることが期待されている。しかしながら地域づくりの現場では人材不足が大きな問題となっている。その理由として、地域づくり人材に必要な知識・技術の体系的な支援方法が明らかではないことが挙げられる。そんな中、鳥取県東伯郡北栄町は地域住民による問題解決型学習の取り組み「ほくえい未来ラボ」を新たに立ち上げた。そこで本研究では、ほくえい未来ラボの参加者の活動記録、アンケート、ヒアリング調査から、潜在的な地域づくり人材の発掘およびそれらの人々が地域づくりを実践するために必要な具体的な支援方法を明らかにする。

**Key Words:** *problem based learning, participatory planning process, region management organization*

## 1. はじめに

地域運営組織には、地域の生活サービスを維持することやコミュニティビジネスの事業主体となることが期待されている。しかしながら、令和3年度地域運営組織の形成及び持続的な運営に関する調査研究事業報告書<sup>1)</sup>によると、持続的な組織運営に向けた課題として「活動の担い手となる人材の不足」といった人材に関する課題が上位を占めていることがわかる。行政または民間企業による人材育成の支援が必要なことは明らかだが、地域課題を対象とした実践的な人材育成プログラムはまだ少なく<sup>2)</sup>、専門家の講演や先進事例の視察等に留まっていることが多いと考えられる。地域づくりの担い手を増やすためには、住民が地域課題に積極的に関わる機会や学びの機会を設ける必要がある。

地域住民が地域課題に関わる機会として、従来ワークショップ(WS)形式による協議の場が設けられてきた。しかし、実際のまちづくりWSでは解決策の提案を行ううえで2つの問題がある。1つ目は地域課題に関する住民の知識に差があること、2つ目は十分な時間を確保できないことである<sup>3)</sup>。前者については、専門家による講演を行うといった工夫が試みられているが、後者の限られた時間の中で具体的なアイデアの提案まで到達するこ

とは難しい。

このような状況を改善するために、2022年5月、鳥取県東伯郡北栄町は新たに「ほくえい未来ラボ」<sup>4)</sup>を立ち上げた。住民参加の場に問題解決型学習(Problem Based Learning, PBL)を取り入れ、住民による地域課題に対する提案を支援することを目的としている。本研究では参加者の活動記録、アンケート、ヒアリング調査から、潜在的な地域づくり人材の発掘およびそれらの人々が地域づくりを実践するために必要な具体的な支援方法を明らかにする。

## 2. 地域づくりの人材育成のための学習項目

### (1) 地域づくりに必要な知識と技術

ここでは、地域づくりを地域運営組織が担う活動と想定し、地域運営組織が抱える人材不足の課題を解決するためにどのような知識・技術をどのような方法で修得するのかを整理する。

地域運営組織の役割のひとつに小さな拠点づくりがある。「小さな拠点」づくりガイドブック<sup>5)</sup>および「小さな拠点」づくりの手引き<sup>6)</sup>は拠点づくりに至る手順を具体的に示している。その手順は計画と実行に大別され、

表-1 地域づくりに必要なプロセスおよび知識・技術<sup>9)</sup>

A. 地域づくり人 育成ハンドブック (総務省, 2012)	
<b>1) 企画・立案</b> ・地域を把握する力…現地調査, ニーズ調査, 統計調査, 地域分析, 地域関係者の把握 ・活動(事業)を考える力(企画力) …自己分析・グループ力の把握, 事例研究, 活動(事業)のイメージづくり ・プランをつくる力(計画力) …企画書作成, 計画書作成 ・ブランドを創る力(ブランディング) …ブランドづくりの意識の理解, プロセスの理解 <b>2) 活動(事業) 運営</b> ・進行管理 ・振り返り…自己評価, 他者評価 ・改善…検証, 対応策の検討, 次の一手	<b>3) 仲間づくり</b> ・呼びかける…イベントの開催 (WS等), 意識の共有 ・人材の把握…メンバーのスキル, 人脈 ・コミュニケーション…傾聴力, 会話力, 調整力 <b>4) つながり</b> ・振り返り…自己評価, 検証, 対応策の検討, 外部人材の活用 ・提案力…情報収集力, 想像力, 提案力, 情報発信・情報共有ツールの選択 ・情報発信力…情報発信力, コンテンツづくり <b>5) プラットフォームづくり</b> ・プラットフォームの形態, 留意点を知る
<b>B. 【実践編】 「小さな拠点」づくりガイドブック (国土交通省, 2015)</b>	<b>C. 住み慣れた地域で暮らし続けるために～地域生活を支える「小さな拠点」づくりの手引き～ (内閣府, 2016)</b>
1) 様々な主体で検討体制をつくる 2) 地域の現状や住民のニーズ・シーズなどを把握する「小さな拠点」の 3) プランを検討する 4) 運営する体制をつくる 5) 取組・活動を始動させる 6) 取組を持続・発展させる	1) 意識の喚起—内発的な計画づくり ・地域住民による気づき ・ワークショップ等の方法により地域住民に議論の場を設けること ・地域の将来ビジョン(地域デザイン)を作成する 2) 取組体制の確立 3) 生活サービスの維持確保 4) しごと・収入の確保

前者の計画づくりでは、地域の現状分析と住民ニーズの把握が重要であることが示されている。

地域づくり人育成ハンドブック<sup>7)</sup>は、地域づくりにおいてリーダーの役割を果たす人が学ぶべきこととして、1) 企画・立案, 2) 活動(事業) 運営, 3) 仲間づくり, 4) つながり, 5) プラットフォームづくりの5つの知識・技術を挙げ、それぞれの学習方法および内容を整理している。表-1に地域づくりに必要なプロセスおよび知識・技術を示す。

## (2) 地域づくりにおける PBL

PBL は Problem(Project) Based Learning の略であり、問題(課題) 解決型学習またはプロジェクト学習と呼ばれる。本研究が取り上げる取り組みは、地域課題をテーマとし、その解決策のひとつとしてプロジェクトの実践も含む。このように課題解決とプロジェクトの双方の目的を含んでいるため、この2つを区別せず、プロジェクト学習の資料<sup>9)</sup>を参考にアンケートの質問項目の作成および考察を行う。

## 3. ほくえい未来ラボ

### (1) ほくえい未来ラボの概要

ほくえい未来ラボ(以降、ほくラボと記す)は、2022年5月に鳥取県東伯郡北栄町で始まった。北栄町は鳥取県の中部に位置し、総人口は14,497人である(2023年3月1日現在)。16名の研究員が4つのチームに分かれ

「新中央公民館大栄分館の未来構想について」をテーマに調査研究を行い、町に政策提言を行った。

### a) ほくラボ設立の経緯

中央公民館大栄分館は施設の老朽化に伴い、中央公民館大栄分館施設のあり方検討委員会の答申<sup>9)</sup>を踏まえ、財政・利便性の向上等について考慮したうえで建て替え等を検討する予定であった<sup>10)</sup>。しかし2021年9月、建て替えに係る基本設計委託料等について手法を含めた再協議を行うことになり<sup>11)</sup>、住民によるワーキンググループを設置する構想が生じた。

### b) 運営体制

ほくラボの運営体制を表-2に示す。研究員は、北栄町内に在住、在勤する18歳以上の人を対象として公募を行った。その結果、20歳代から70歳代の16名が集まった。研究員の性別と年代を表-3に示す。

ほくラボの事務局は北栄町中央公民館の職員が、グループワークのファシリテーターは役場職員が務めた。外部支援として、コーディネーターを大学教員、審査員を民間企業の職員や近隣自治体の教育長が務めた。

### c) プログラム設計の方針

ほくラボの設計はインストラクショナルデザイン<sup>12)</sup>およびプロジェクト学習の設計<sup>9)</sup>を参考に、学ぶ、試行錯誤する、まとめるの3つのプロセスに分け、それぞれ地域課題の仮説の構築、仮説の修正、仮説の提案とした。研究員およびファシリテーターの負担を軽減するために、調査・分析については自主的な活動とした。全体のスケジュールを表-4に示す。

表-2 運営体制

研究員	北栄町に在住または在勤する者 16名
事務局	公民館職員 2名
コーディネーター	大学教員 1(1)名
ファシリテーター	役場職員 8名
書記	大学生 4名
審査員	大学教員 2(2)名 民間企業 2名 教育委員会 1名 役場職員 1名
話題提供者	大学教員 2(1)名

( )内の数値は他の役割を兼任している者の人数を示す。

表-3 研究員の概要

性別	男性 8名, 女性 8名
年代	20歳代 3名    30歳代 3名 40歳代 4名    50歳代 1名 60歳代 1名    70歳代 4名

表-4 ほくラボのスケジュール

	日付	内容
1	2022/5/15	講義・ワールドカフェ
2	2022/6/19	講義・グループワーク
3		調査・分析
	2022/8/10	専門家による講演 (財政)
4	2022/9/23	各チームの発表・審査
5		再調査・分析
	2022/11/3	専門家による講演 (社会教育)
6	2022/12/17	最終発表会
		町民投票
7	2023/1/22	修了式

(2) プログラムの内容

a) 第1回 課題の設定

「知る」パートと「語らう」パートの2部構成で実施した。まず、コーディネーターがほくラボのスケジュールや方法について説明を行い、次に北栄町副町長が「ほくラボからの地域づくり」と題した講義を行い、公民館の現状および町の意向を説明した。続いて「公民館のあり方を考えるうえで大切な視点」をテーマにワールドカフェ形式で意見交換を行った。ファシリテーターを役場職員が務め、1回あたり15分の意見交換を4回実施した。その後、参加者はレポートを作成した。レポートでは、1) 講義およびワールドカフェの感想、2) チーム分けの要望、3) 調査や分析に関するスキルの有無をたずね、第2回以降のチーム分けの参考資料とした。

b) 第2回 仮設の構築

学習目標を「仮説の構築」とし、4つのグループに分かれて協議をした。1) 10年後の北栄町のためにどんな公民館が必要か、2) その公民館は北栄町のどんな課題を解

表-5 提案の評価項目

提案内容	理想像	有効性	・北栄町の問題解決に資するものか (まちづくりビジョン、過疎地域維持的開発計画等) ・北栄町の将来について述べているか
	機能・設備	客観性	客観的な情報 <sup>*)</sup> に基づいた提案か ・一般的情報: ネット, 書籍, HP等 ・固有情報: 現地調査, 資料, データ等 ・体験的情報: 実験, 実体験 ・継続的情報: 定点観測 (環境変化や人の動き)
		具体性	・公民館が果たす機能が明確か ・使用方法のイメージがわくか ・それを達成するための設備か
		実現性	・北栄町の現状と将来に適したものか (人口, 経済規模等)
その他	その他	整合性	・理想の公民館につながるか ・なぜその機能・設備が必要か理由を述べているか
		場所	・建設場所について検討されているか ・理由を述べているか
	発表形式	表現	・町民に伝わるようにわかり易い言葉を使っているか
		簡潔か	・伝えたいことが簡潔に示されているか
その他	発表形式	情報整理	・グラフやフレームワーク等を使って情報が整理されているか
		論理	・論理的に示されているか

表-6 各チームの最終提案

チーム	題目
A	つなぐ・つながる公民館～北栄町の未来へ～
B	子育てに優しい公民館
C	中の人を育て、外の力を活用してたしかな豊かさを実現する公民館
D	これからの中央公民館大栄分館

決めるのか、3) 具体的な取り組み (コト) ・設備 (モノ) は何か、4) 提案の根拠となる情報はどんなものか・どのように集めるのかという4つのテーマについて120分間話し合った。

c) 第3～4回 仮設の修正

各チームは2か月の間に各自調査を行い、新しい公民館に関するアイデアを発表資料にまとめ中間発表に臨んだ。中間発表では5名の審査員が採点及び講評を行った。評価項目を表-5に示す。その後、各チームでグループワークを行い、講評を踏まえて調査の計画を立てた。

また、この期間には専門家を招き「財政と地域のニーズから考える公共施設のこれから」と題した講演会を実施した。講演会は一般公開し研究員以外も参加できる形とした。

d) 第5～6回 提案

各チームは再び調査を行い、最終提案をまとめた。この期間にも専門家を招き「これからの公民館と地域づく

表-7 プロジェクト学習で身につく力<sup>8)</sup>と地域づくりに必要な力、ほくらボの評価項目

	プロジェクト学習で身につく力 <sup>8)</sup>	A	B	C	ほくらボ
1) 準備	観察する力	地域を把握する力	地域の現状や住民のニーズ・シーズなどを把握する	地域住民による気づき	北栄町の問題解決に資するものか
	状況をつかむ力				
	現実から問題を見出す力				
	社会へ参画する意識				
2) ビジョン・ゴール	俯瞰する力	活動(事業)を考える力	「小さな拠点」づくりプランを検討する	地域の将来ビジョンを作成する	北栄町の将来について述べているか
	目標を設定する力				
	ビジョンを描く力				
	やり遂げる意思				
3) 計画	前向きな姿勢	プランをつくる力			
	すべきことをイメージする力				
	優先順位を決める力				
4) 情報・解決策	時間的的確に配分する力	地域を把握する力	地域の現状や住民のニーズ・シーズなどを把握する		客観的な情報に基づいた提案か  北栄町の現状と将来に適したものか(人口、経済規模等)
	情報を見極める力				
	分析する力				
	比較・分類する力				
	事態への対応力				
	礼儀・礼節				
	多面的にもものを見る力				
創造力					
5) 制作	わかりやすく表現する力	提案力			グラフやフレームワーク等を使って情報が整理されているか
	情報を取捨選択する力	情報発信力			
	図、表、グラフを適切に使う力				
	概念図などを使い端的で簡潔に表現する力				
6) プレゼンテーション	コミュニケーション力	コミュニケーション		地域住民に議論の場を設けること	町民に伝わるようにわかり易い言葉を使っているか
	ノンバーバルな表現をする力	提案力			
	比喩等でわかりやすく表現する力				
	根拠をもとに説明する力				
	聞き手の想いや理解を推察して話す力	情報発信力			
	他者のプレゼンを評価する力				
他者のプレゼンから学びとる力					
7) 再構築	論理的に表現する力	振り返り			論理的に示されているか  伝えたいことが簡潔に示されているか
	根拠に基づいて結論を導く力				
	適切に項目立てし、見出しを立てる力				
	的確で簡潔な文章を書く力				
	試行錯誤しつつよりよいものを生み出そうとする姿勢、推敲力				

A, B, Cは表-1に対応する。

り」と題した講演会を実施した。講演会は一般公開し研究員以外も参加できる形とした。

各チームの最終提案を表-6に示す。最終発表では中間発表と同様に4名の審査員が採点及び講評を行った。ここでは、表-5の項目について前回と比較してどうかという視点で採点を行い、1位のチームを決めた。さらに、4つの提案を町のHPに掲載し町民の投票を募った。

#### 4. ほくらボの地域づくりへの貢献

プロジェクト学習で身につく力<sup>8)</sup>、地域づくりに必要な力<sup>9)</sup>、ほくらボの評価項目(表-5)を整理した結果を表-7に示す。ほくらボはプロジェクト学習のプロセスに基づき設計されているが、町への政策提言を通して地域づくりに必要な能力が身につく可能性がある。

現在、研究員に対しアンケートおよびヒアリングを行っている。結果については研究発表会で示す。

謝辞：本研究はJSPS 科研費 JP21K14267 の助成を受けて行った研究の成果を含む。また研究遂行にあたり、北栄町中央公民館およびほくらボ未来ラボの研究員に調査への協力を得た。ここに記して謝意を示す。

#### REFERENCES

- 1) 総務省地域力創造グループ地域振興室：令和3年度地域運営組織の形成及び持続的な運営に関する調査研究事業報告書，2022。
- 2) 小川直史，羽鳥剛史，片岡由香，尾崎信：まちづくり人材育成プログラムにおける学習経験と担い手像の形成に関する研究—松山アーバンデザインスクールの試み—，土木学会論文集 D3 (土木計画学)，Vol. 76, No. 5, pp. I\_569-I\_588, 2021。
- 3) 長曾我部まどか：みんなで作るまちづくりワークショップ—ファシリテーションのかきくけこ—，今井出版，2021
- 4) 北栄町：令和4年度『新中央公民館大栄分館の未来

- 構想について』, <https://www.e-hokuei.net/10990.htm>
- 5) 国土交通省国土政策局, 実践編「小さな拠点」づくりガイドブック, 2015.
  - 6) 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局: 住み慣れた地域で暮らし続けるために～地域生活を支える「小さな拠点」づくりの手引き～, 2016
  - 7) 総務省人材活性化・連携交流室: 地域づくり人育成ハンドブック, 2012.
  - 8) 鈴木敏恵: プロジェクト学習の基本と手法—課題解決力と論理的思考力が身につく, 教育出版, 2012.
  - 9) 中央公民館大栄分館施設のあり方検討委員会: 中央公民館大栄分館施設のあり方について—答申—, 2020.
  - 10) 北栄町企画財政課: 北栄町公共施設個別施設計画(第 1 期) 概要版, 2021.
  - 11) 北栄町議会: 令和 3 年 9 月定例会議案の撤回の申し出について, 2021.
  - 12) 稲垣忠, 鈴木克明 編著: 授業設計マニュアル Ver.2—教師のためのインストラクショナルデザイン, 北大路書房, 2011.
- (Received ??, 2023)  
(Accepted ??, 2023)

PRACTICING PROBLEM-BASED LEARNING WITH RESIDENTS  
- A CASE STUDY OF HOKUEI FUTURE LABORATORY -

Madoka CHOSOKABE and Keishi TANIMOTO